「ヒロノビト」とは…　毎号、広野町との様々な関わりや、町への想いを持って暮らす方にフォーカスし、仕事や私生活のリアルを語っていただくインタビューコーナー。

hironobito
ヒロノビト
03

縁側の家
高橋 優子 さん

広野町出身。東京学芸大学大学院修士課程修了（音楽学）。在学中・卒業後に世界各国を回り、現在は東京にある団体でメディア対応やアート・デザイン・建築・音楽などのプロジェクトを担当。広野町でカルチュラル・プラットフォーム「縁側の家」を運営しながら、毎週2泊3日で東京へ通う二拠点生活を行っている。

アート、サーフィンのコミュニティを通して、広野町のリアルを伝える

自分の中の大切な存在、海を取り戻すために、帰って来るようになりました

私は生まれも育ちも広野町で、大学進学をきっかけに上京、それからは東京が拠点の生活でした。大学卒業後は、海外で仕事をしつつ2～3年間過ごし帰国。再び東京で働き始めて2年後に東日本大震災が発生し、東京へ避難して来た母と一緒に暮らしていました。そんな時にサーフィンを始め、週末ごとに広野町に帰って来るようになりました。

空き家を購入したのは、2016年。現在は、広野町と東京の二拠点生活をしています。二拠点生活を始めたのはサーフィンがきっかけですが、広野町がとてもユニークな場所になったというのも大きな要因です。広野町は、「福島第一原発」から20～30キロメートルの狭間にあり、避難区域になる・ならない、補償の問題など、「福島第一原発」からの距離で色々と測れるのですが、そんな境界の真っ只中にある場所が広野町なんです。様々な境界が交錯する場所となり、日々変化し続ける、そんなユニークな状況をぜひ発信していかなければと思うようになりました。

発信しなければならないと思ったもう一つの理由は、震災にまつわる広野町の語られ方に、疑問があったからです。特に国際的なメディアにおいては、被災した地、汚染された地など、可哀想な見方でしか伝えられていませんでした。それって違うよねって。家族が近くにいて、豊かな自然があって、良い仲間がいて、割と楽しくやっていますよと。自分たちのストーリーを自分たちの手に取り戻す、自分の物語は自分で語る、そういう発信をしなくてはならないと思いました。

アートの力で、自分たちのメッセージを届けたい

「縁側の家」では、境界、共有、身体を考える、アーティスト・イン・レジデンスのairバージョン「アーティスト・イン・レジデンスインエアー（air in air）」を行っています。長期滞在前提ではなく、来れる時にちょっとだけ来るのを繰り返し、長い期間をかけて、境界の真っ只中にある「縁側の家」での体験を、来てくれた方自身の体験とミックスしてくれたら良いのではないかと考えています。そして、それぞれが体験したことを共有していけば、境界もゆるやかに無くなっていき、輪がどんどん広がっていく。そんな空気（air）感のアーティスト・イン・レジデンスが、「アーティスト・イン・レジデンスインエアー（air in air）」です。

安心できて穏やかな気持ちでいられる、大切なコミュニティがあります

東京にいる時には仕事上、世界や社会など、大きくぼんやりとしたものの役に立ちたいと思うのですが、地元の広野町ではよりコミット感が強いというか、そばにいる大切な人や大事なコミュニティにとって良き存在でありたいと強く思います。私の場合はサーフコミュニティが特に大きな存在なので、福島県のサーフコミュニティが周囲にとってより良い存在になれれば良いなと思っています。また、私は子どもがいないのですが、次の世代の人たちに向けて何か届けられたらなとも思っていて。それも、広野町に拠点があるから感じられることなんです。

これから面白いことが始まる！ワクワクが溢れています

広野町は今、小さい種が、面白いことが始まる種が、ちょっとずつ大きくなっているところなので、そのワクワクの種を育てる楽しみがあります。また「ふたば未来学園」では、クリエイティブで豊かな教育がなされているので、将来その子たちが生み出す波及効果にも期待しています。広野町にはすでに良い基盤があるのですが、より飛躍できるものすごい可能性を秘めていると思うので、これからが楽しみです。

新たなヒロノビトに向けてひとこと！

広野町の住民の方は、おおらかで優しい人たちばかり。居心地の良いコミュニティがたくさんありますし、新たなコミュニティも生まれています。ぜひ自分に合ったコミュニティを見つけて、参加していただきたいですね。単純にそばにいて良いという、安心感や帰属感を得られると思います。アクセスも、常磐線で2時間半ぐらいなので、首都圏との行き来も可能。都心へ乗り換え無しで行けるので、二拠点生活も可能です。